

標準アラビア語の二重主語構文 —ゼロ繋辞文を中心に— *

Soliman ALAAELDIN

要旨

本論では、標準アラビア語の二重主語構文 (Double Subject Construction) を考察し、その特性を述べる。

標準アラビア語の二重主語構文は、ゼロ繋辞文の一種であり、その主 - 述関係は限定関係により成立する。二重主語構文は二重主格表現になっており、一致関係では、第二主語の接尾形所有代名詞は、第一主語の性・数に一致する。また、述語は、第一主語ではなく、第二主語の性・数に一致する。

さらに、第一主語と第二主語との統語的關係では、第二主語に接尾形所有代名詞が存在しているため、第一主語と第二主語の語順と意味関係は [全体-部分]、あるいは [所有者-所有物] と定められている。

キーワード : 二重主語構文, ゼロ繋辞文, 接尾形所有代名詞, 全体-部分, 所有者-所有物

1. 序

日本語の<A は B が C>に相当するような二重主語構文¹⁾はタイプを異にするさまざまな言語に広く現れる (泉井 1967 など)。しかしそれにもかかわらず、なぜか二重主語構文の研究は日本語、中国語などのアジア系の言語の一部を中心に行われてきた。諸言語におけるその全体像を解明するためには、アジア系の言語だけでなく、他の個別言語レベルにおける二重主語構文の形態・成立条件・使用範囲などを記述し、その構文を判断する際の尺度 (チェックリスト) を作る必要があると思われる。その一環として、本論では、標準アラビア語²⁾の二重主語構文³⁾の特性を記述する。本論では、まず 2 でアラビア語を概略し、3 では、二重主語構文の構造と成立条件について述べる。3.1 では、第一主語と第二主語の関係、3.2 では述語について記述する。最後に 4 で、二重主語構文において、時制を担う不完全動詞が義務的に対格を要求するという、統語的に異例の現象について述べる。

2. アラビア語の概略と先行研究

以下の 2.1 では、本論文の理解に必要と思われるアラビア語の概略を行い、2.2 では、アラビア語伝統文法における二重主語構文の扱いを取り上げる。

2. 1 アラビア語の統語・形態的な概略

アラビア語はアフロ・アジア語族セム語派に属する言語である。標準アラビア語は語形成を専ら派生に頼り、言語タイプの上では、形態論的には総合的言語 (Synthetic Language) である。他の多くの言語と同様に名詞と動詞を区別するが、動詞と助詞以外の品詞 (形容詞など) は名詞と同じ格語尾を持ち、そのため形態的には独自の範疇をなしていない。

基本語順は VSO である。文は構造上、動詞文 (VP NP₁ NP₂) と動詞 (句) を欠くゼロ繫辞文⁴⁾ (NP₁ NP₂) とに大別される。ゼロ繫辞文は現在時制の場合、繫辞がなく、

(1) のように主 - 述関係は主部の限定⁵⁾と述部の非限定という条件下で成立する。述部が限定されると (2) のように原則として修飾構造を持つ句になる。

- 1) ʔal-rajul-u mudarris-u-n
 def-男-Nom 教師-Nom-indef
 その男は教師である。

- 2) ʔal-rajul-u l-mudarris-u
 def-男-Nom def-教師-Nom
 教師であるその男

過去時制と未来時制の場合、時制を表すいくつかの不完全動詞が現れて動詞文に変わり、主部は「主格」、述部は「対格」になる⁶⁾。

動詞で始まる文の文法関係は基本的に格形によって表され、前置詞および語順がこれを補足する。格標識は名詞の語尾に現れる⁷⁾。動詞は人称 (1・2・3)、性 (男・女)、数 (単数・双数・複数) に応じて活用する。形容詞は限定用法の場合、非修飾名詞の (非) 限定・性・数と一致し、叙述用法の場合、非修飾名詞の性・数と一致する。

属格関係は以下の (3) の [主要部-Nom/Acc/Gen Ø 付属部-Gen] ように、主要部 (所有物など) と付属部 (所有者など) との間に属格関係を表す要素がなく、付属部 (dependent) は属格で標示される。

- 3) bait-u/a/i Zaid-in
 家-Nom/Acc/Gen ザイド.M-Gen
 ザイドの家が/を/の

2. 2 先行研究

アラビア語の伝統文法では、日本語の<A は B が C>に相当するような文は、「(名詞)文の述部を持つ文」と呼ばれており、<A は B>の文とは区別されていない。この中で、第一主語と第二主語に相当する要素が存在することは指摘されているものの、第一主語と第二主語の関係、また、その文の特殊性には触れられていない。

さらに、従来の標準アラビア語、およびアラビア語諸方言に関する研究においても、二重主語構文の研究、特に第一主語と第二主語の関係をとり上げ、記述しているものは、管見の限り見当たらない。

3. [NP₁ N-pron₂ Pred] 構文の形態と統語的な特徴

以下では、二重主語構文の構造と成立条件について述べる。標準アラビア語の二重主語構文の典型的な例は以下のような文(5-12)である。これらの文はゼロ繫辞文であり、主-述関係は限定関係により成立する。標準アラビア語の無標ゼロ繫辞文の主部は常に限定名詞句であり、述部は非限定である(Soliman 2008:26-30)。(5-12)の文は以下の限定構造を持つ。

$$4) \quad [NP_1 \ N\text{-pron}_2 \ NP_3] = [\text{限定}_1 \ \text{限定}_2 \ \text{非限定}_3]$$

NP₁ (以下、第一主語と呼ぶ) と NP₂ (以下、第二主語と呼ぶ) の間にはポーズはなく、第一主語は文全体の主語であり、第二主語は述部節 [N-pron₂ N₃] の主語である。第一主語は限定名詞句であり、第二主語と共に主格で標示される。第二主語には第一主語の性・数と一致する接尾形所有代名詞が付く。この接尾形所有代名詞は第一主語をうけ、第二主語が第一主語に帰属することを表す。以下の(5)の第二主語 ?anf-u-hu <彼の鼻>、(6)の第二主語 saiyārat-u-hu <彼の車>には、それぞれの第一主語 ?al-fil-u <象>、Muhammad-un <ムハammad>の性・数と一致する接尾形所有代名詞-hu⁸⁾ が付いている。この接尾形所有代名詞の機能については3.1で説明する。

述語は原則として、第一主語ではなく、第二主語の性・数と一致する。(5)の第二主語 ?anf<鼻>が男性・単数であることを受け、述語は、ṭawīl-u-n<長い> (=男性・単数) となる。(6)の第二主語 saiyārat-u-hu<彼の車>は女性・単数であるため、述語は、kabīra-t-u-n<大きい> (=女性・単数) となる。

このように、この種の構文は二重主格表現になっており、一致関係では、第二主語の接尾形所有代名詞は、第一主語の性・数に一致する。また、述語は、第一主語ではなく、第二主語の性・数に一致する。このような構文は、いわゆる二重主語構文に他ならない。

- 5) ʔal-fīl-u ʔanf-u-hu ʔawīl-u-n
 def.象.M-Nom 鼻.M-Nom-Pron.3.M 長い.M-Nom-Indef
 象は鼻が長い。
- 6) Muḥammad-un saiyārat-u-hu kabīrat-u-n
 ムハammad.M-Nom 車.F.Sg-Nom-Pron.3.M 大きい.F-Nom-Indef
 ムハammadは車が大きい。
- 7) hāḍihi l-šajarat-u ʕimār-u-hā laḍīḍat-u-n
 この.F def.木.F-Nom 実.Plur-Nom-Pron.3.F おいしい.F-Nom-Indef
 この木は、実がおいしい。
- 8) ʔal-yābān-u jibāl-u-hā kaḥīrat-u-n
 def.日本.f-Nom 山.Plur-Nom-Pron.3.F 多い.F-Nom-Indef
 日本は山が多い。
- 9) ʔaṣ-ṣaḥarāʔ-u hawāʔ-u-hā nazīf-u-n
 def.砂漠.F-Nom 空気.M-Nom-Pron.3.F きれいな.M-Nom-Indef
 砂漠は空気がきれいだ。
- 10) ʔal-falsafat-u baḥr-u-hā wāsiʕ-u-n
 def.哲学.F-Nom 海.M-Nom-Pron.3.F 広い.M-Nom-Indef
 Lit: 哲学は海が広い。(哲学の海は広い。)
- 11) Muḥammad-un wālid-u-hu mudarris-u-n
 ムハammad-Nom 父-Nom-Pron.3.M 先生.M-Nom-Indef
 Lit: ムハammadは、(彼の)父が先生だ。(ムハammadの父は先生だ。)
- 12) Zaid-un ṭabīb-u-hu māhir-u-n
 ザイド-Nom 医者.M-Nom-Pron.3.M 上手.M-Nom-Indef
 Lit: ザイドは、(彼の)医者が上手だ。(ザイドの医者は上手だ。)

上記の(5-12)は、属格表現で書き換えることができ、従って単一主語構文でも言い表すことができる。属格を用いた単一主語構文では、二重主語構文の第二主語の接尾形所有代名詞が削除され、属格で標示される。この場合、属格関係になるので、[主要部-Nom/ Ø

付属部-Gen] の語順に変わる。以下の (13-14) は、二重主語構文 (5-6) を単一主語構文にしたものである。

13) ʔanf-u l-fil-ī ṭawīl-u-n
 鼻.M-Nom def-象-Gen 長い.M-Nom-Indef
 象の鼻は長い。

14) saiyārat-u Muhammad-in kabīra-t-u-n
 車.F-Nom ムハammad Gen 大きい.F-Nom-Indef
 ムハammadの車は大きい。

二重主語構文 (5-6) と単一主語文 (13-14) には、言うまでもなく意味に違いがある。(5-6) では、ʔal-fil-u<象>、Muhammad-un<ムハammad>がそれぞれの文の話の中心(焦点)をなしている。一方、(13-14) の話の中心は、ʔanf-u<鼻>、saiyārat-u<車>である。

3. 1 第一主語と第二主語の関係

ここでは、まず、二重主語構文の第一主語の特徴について述べ、次に第一主語と第二主語との関係について考察する。

品詞の面から見ると、第一主語になれる要素は、上例の (5-12) からわかるように、普通名詞、固有名詞などである。独立した人称代名詞 (=分離人称代名詞) が第一主語に立つことも可能であるが、しかしその場合、第一主語と第二主語の接尾形所有代名詞は意味上重複するので、(15) のように、第一主語である人称代名詞は余剰化し、ふつう省略される。

15a) (ʔanti) kitāb-u-ki ṭaqīl-u-n
 あなた.2.F 本.M-Nom-Pron.2.F 重い.M-Nom-Indef
 (あなたは) あなたの本が重い。

b) (huwa) kitāb-u-hu ṭaqīl-u-n
 彼 本.M-Nom-Pron.3.M 重い.M-Nom-Indef
 (彼は) 彼の本が重い。

アラビア語の二重主語構文は、統語および意味構造の上での以下の四点を大きな特徴としている。

まず統語的には、アラビア語の二重主語構文では、①第二主語に第一主語と呼応する

接尾形所有代名詞が義務的に付加される。②関与する各項の間に一致条件が掛かり、第一主語の性と数は、第二主語の接尾形所有代名詞のそれらと一致し、第二主語の性と数は、述語のそれらと一致しなくてはならない。この二重の一致関係により、文の主語－述語関係は明示的に表現される。意味の上では、前述のごとく③第一主語が限定、第二主語は人称代名詞による限定、そして述語は非限定という構造を持つ。さらに、④必須的に、第一主語が「全体または、所有者」を表し、第二主語は「部分または、所有物」を表す。以下では、日本語の二重主語構文と対照させつつ、これらの条件と、そこから生じるアラビア語二重主語構文の特性をより詳しく検討して行く。

まず限定条件③から見て行くと、第一主語と第二主語を反転させても「限定₁－限定₂－非限定₃」という構造は変わらないので、これにより(16)のような主語の反転は構造的には可能である。しかし日本語と違い、この反転形式は情報構造の変化を伴わず、通常、不自然と感じられる。詩などの文学的表現を除いて現れない。

- 16) *ʔanf-u-hu ʔal-fil-u ʔawīl-u-n
 鼻.M-Nom-Pron.3.M def-象-Nom 長い.M-Nom-Indef
 鼻は象が長い。

接尾形所有代名詞の存在①は意味構造にさまざまな影響を及ぼす。まず第一に、所有代名詞の働きにより第一主語と第二主語との意味関係が「全体-部分」、あるいは「所有者-所有物」に制限される。言い換えれば、二重主語構文が用いられるのは「全体・所有者」を話の中心にする場合である。従って「部分・所有物」の方を話題の中心にする場合は、(13) かまたは (17) のように単一主語文で表現されうるので、あえて二重主語構文を使う必要がない。

- 13) ʔanf-u l-fil-ī ʔawīl-u-n
 鼻.M-Nom def-象-Gen 長い.M-Nom-Indef
 象の鼻は長い。

- 17) ʔal-fil-u ʔawīl-un ʔanf-an⁹⁾
 def-象.M-Nom 長い.M-Nom 鼻.M-Acc
 Lit: 象は長い、鼻を。(鼻において、象は長い。)

(16) のような文がアラビア語では不自然さを感じさせる一方で、(6) や (12) のように、日本語では一概に容認できるとは言えないような文も、アラビア語では、「ムハツマド」と「車」、「ザイド」と「医者」の関係が、接尾形所有代名詞によって明示されう

るものであるため、何ら不自然さを感じさせない。

- 6) Muḥammad-un saiyārat-u-hu kabīra-t-u-n
ムハammad.M-Nom 車.F.Sg-Nom-Pron.3.M 大きい.F-Nom-Indef
ムハammadは車が大きい。

- 12) Zaid-un ṭabīb-u-hu māhir-u-n
ザイド-Nom 医者.M-Nom-Pron.3.M 上手.M-Nom-Indef
Lit: ザイドは、(彼の) 医者が上手だ。(ザイドの医者は上手だ。)

日本語では「メアリーは眼が大きい」にくらべ「メアリーは家が大きい」のように分離所有物を第二主語とする二重主語文は許容度がやや落ちるが、アラビア語では第二主語に付く接尾形所有代名詞が第一主語との関係を明示しているため、(18) が問題なく成立する。所有関係の標示により、使用範囲の境界が日本語よりも明確になっていると考えられる。

- 18) ʕaliy-un bināyat-u-hu kabīr-at-un
アリー.M-Nom ビル.F-Nom-Pron.M3 大きい-F-Nom
アリーは (彼の) ビルが大きい。

これとは逆に、アラビア語の二重主語構文では、第一主語、第二主語の二項が[全体部分]、[所有者-所有物]の関係でなく包摂・上下関係(hyponymy)になると、不自然になる。

- 19) *ʔal-ʔasmāk-u šalbūt-u-hā laḏīd-u-n
def-魚-Nom 鯛-Nom-Pron.3.F おいしい-Nom-Indef
(意図された意味： 魚は鯛がおいしい。)

この文例では、第一主語 ʔal-ʔasmāk-u<魚>は上位語 (hyponym)、第二主語 šalbūt-u-hā<鯛>は、下位語 (hyponym) である。アラビア語では *ʔasmāk-u ʔal-šalbūt-i (魚の鯛) という所有表現そのものが成立せず、この制限により二重主語構文の成立条件に欠けているのである。このように第一主語と第二主語に上下関係がある場合は、二重主語構文でなく、下記 (20) のような [A は B だ] 構文で表現するのが自然であり、普通である。

- 20) ʔš-šalbūṭ-u samak-u-n laḏīḏ-u-n
 def-鯛-Nom 魚-Nom-Indef おいしい-Nom-Indef
 鯛はおいしい魚だ。

同様に、「電話は昼が安い」という日本語の二重主語構文は、アラビア語では成立しない(21)。アラビア語では、第二主語の「昼」に接尾形所有代名詞をつけないといけないが、「電話」と「昼」の間には、全体-部分関係や所有関係が存在せず、「電話は(その)昼が安い」とは言えない。

- 21) *ʔal-mukālamāt-u zahīrat-u-hā raxīs-at-un
 def-電話.F-Nom 昼.F-Nom-Pron. F.3 安い-F-Nom
 (意図された意味：電話は昼が安い。)

アラビア語二重主語構文の第一主語と第二主語の根底には、このように[全体-部分]、[所有者-所有物]という関係が見られる。しかし、(10)の「哲学は海が広い」は、「哲学」と「海」との間に全体-部分関係や所有関係が認められないにもかかわらず許容可能であり、この事実を所有の字義的意味だけから説明することには無理がある。

結論的にいうと、ここには概念的隠喩が関係しており、アラビア語の母語話者に「哲学は海である」「海は広がりである」という概念構造の前提があるからであると考えられる。「哲学は海が広い」という文は、「哲学はその容量・面積が広い」というように容易に認識できるのである。(22)の文も、同様の理由で成立する。

- 10) ʔal-falsafat-u baḥr-u-hā wāsiṭ-u-n
 def-哲学.F-Nom 海.M-Nom-Pron.3.F 広い.M-Nom-Indef
 Lit: 哲学は海が広い。(哲学の海は広い。)

- 22) ʔal-harb-u tarīq-u-hā waṣīr-un
 def-戦争.F-Nom 道.M-Nom-Pron.F.3 険しい.M-Nom
 戦争は道が険しい。

3. 2 述語

アラビア語の二重主語構文の述語の部分は第二主語の性質や状態を表すので、(5-10,12)のように形容詞がよく使用されるが、名詞述語(11)や前置詞句が使用される(23)のような場合もある。

- 23) Muhammad-un wālid-u-hu fi l-bait-i
 ムハammad Nom 父-Nom-Pron.3.M に def-家-Gen
 ムハammadはお父さんが家にいる。

形容詞や名詞が述語である場合、その述語は非限定であり、その意味機能はふつう帰属的 (ascriptive) であるが、(24) のように第二主語の性・数と一致する分離 (三人称) 代名詞がある場合、述部には必須的に限定辞が付加され、同定表現 (identificational) になる。つまり、「A < B」はゼロ分離三人称代名詞構文 (23) で表現され、「A = B」は分離三人称代名詞構文 (24) で表現される (Soliman 2008)。

- 24) ?al-ftl-u ?anf-u-hu huwa l-ṭawīl-u
 def-象-Nom 鼻.M-Nom-Pron.3.M Pron.3.M def-長い.M-Nom
 象は、(その) 鼻こそが長い。

また、「A = B」の場合、「A」と「B」は同じ値を表さなければならないため、述語が前置詞句である (25) の場合、このような分離人称代名詞は使用できない。

- 25) *Muhammad-un wālid-u-hu huwa fi l-bait-i
 ムハammad-Nom 父-Nom-Pron.3.M Pron.3.M に def-家-Gen

4. 二重主語構文の時制

現在時制のアラビア語のゼロ繫辞文「A < B」は、(26a) のように、繫辞がなく、主-述関係は主部の限定と述部の非限定を成立条件としている。いうまでもなく、この場合、主語と補語は主格で標示される。過去、または未来時制の場合には、(26b) のように、時制を表す動詞が付加され、主語は「主格」、述語は「対格」になる。

時制を表す動詞は、主語と述語を形成する二項を必要とし、一項だけで意味が成立しないので、不完全動詞と呼ばれる。

- 26a) Muhammad-un tālib-un (現在時制)
 ムハammad Nom 学生-Nom
 ムハammadは学生だ。

- b) kāna Muhammad-un tālib-an (過去時制)
 だった ムハammad Nom 学生-Acc
 ムハammadは学生だった。

しかし、二重主語構文では、時制を表す不完全動詞の文中の位置によって文の格構造が変動する。(27a) のように不完全動詞 *kāna*<だった>が文頭に来た場合、それは第一主語の性・人称と一致し、文の格構造は変わらないが、第二主語の前後に来た場合 (27b,c) には、不完全動詞の性・数・人称は第二主語と一致し、述語は「対格」になる。

27a) *kāna* *Muhammad-un* *saiyārat-u-hu* *kabīra-t-u-n*
 だった.3.M.Sg ムハammad.M-Nom 車.F.Sg-Nom-Pron.3.M 大きい.F-Nom-Indef
 Lit: ムハammadは (彼の) 車が大きかった。
 (ムハammadが大きな車を持っていた。)
 Muhammad used to have a big car.

b) *Muhammad-un* *kānat* *saiyārat-u-hu* *kabīra-t-a-n*
 ムハammad.M-Nom だった.3.F.Sg 車.F.Sg-Nom-Pron.3.M 大きい.F-Acc-Indef
 Lit: ムハammadの車は大きかった。
 (ムハammadは (彼の) 車が大きかった)

c) *Muhammad-un* *saiyārat-u-hu* *kānat* *kabīra-t-a-n*
 ムハammad.M-Nom 車.F.Sg-Nom-Pron.3.M だった.3.F.Sg 大きい.F-Acc-Indef
 (ムハammadは (彼の) 車が大きかった)
 ムハammadの車は大きかった。

上記の (27a) と (27b,c) との格構造の違いは、動詞の位置によるものである。

(27a)では、不完全動詞の *kāna* の主語は、第一主語 *Muhammad-un*<ムハammad>である。動詞は主語と性・数が一致しており、主語は「主格」で標示されている。しかし、*saiyārat-u-hu*<彼の車>、*kabīra-t-u-n*<大きい>も、その述語ではないため、この文ではそのどちらかが「対格」に置かれることはなく、「主格」で標示されている。つまり、(27a)では、格配列によって *kāna* の述語は *saiyārat-u-hu kabīra-t-u-n*<彼の車は大きい>の節全体であることが標示されているのである。

他方 (27b, c) では、時制を表す動詞 *kānat* の主語は第二主語の *saiyārat-u-hu*<彼の車>であり、動詞の性と数は第二主語に一致している。*kabīra-t-u-n*<大きい>はその述語として対格で表示されている。

このように、アラビア語の二重主題文の両主語は時制を表す動詞の主語になることができる。動詞の位置は文の意味を大きく変えることはないが、(27a) のように文頭に来た場合、若干、第一主語 (所有者) の習慣的行為の意味が発生する。(27b,c) のように、第二主語の性質に焦点をおいた二重主語構文の場合、時制を表す動詞は第二主語の前後

に置かれるほうが自然である。

5. 結論

アラビア語の二重主語構文 [NP₁ N-pron₂ NP] <A は B が C>の特性は、以下の(1-9)にまとめられる。

1. アラビア語の二重主語構文の第一主語と第二主語は常に限定されている。
2. 第一主語と第二主語は常に「主格」で標示される。
3. 第二主語に第一主語の性と数に一致する接尾形所有代名詞がつく。
4. 述部は第二主語の性・数と一致する。
5. 第一主語と第二主語は、[全体 - 部分] [所有者 - 所有物] という意味関係を基底としているが、その関係にはアラビア語母語話者の持つ文化的概念も関わっている。
6. アラビア語には、日本語のような第一主語「全体」と第二主語「部分」の反転はない。
7. 第一主語、第二主語の二項が包摂関係・上下関係 (hyponymy) にある場合、二重主語構文は不自然になる。
8. 第二主語の性・数と一致する分離人称 (三人称) 代名詞の出現と述部の限定により、二重主語構文は同定表現 (identificational) <A は B=C>になる。
9. 二重主語構文において、時制を担う不完全動詞が義務的に対格を要求するという現象がある。

今後の課題として、アラビア語の二重主語構文とその周辺の構文を分析し、二重主語構文を持つ他の言語との対照研究を行いたいと考える。

ローマ字転写

ʔ	声門閉鎖音	b	有声両唇閉鎖音
t	無声歯齒茎閉鎖音	θ	無声歯摩擦音
j	有声歯茎硬口蓋破擦音	h	無声咽頭摩擦音
x	無声軟口蓋摩擦音	d	有声歯齒茎閉鎖音
ð	有声歯摩擦音	r	有声歯茎ふるえ音
z	有声歯齒茎摩擦音	s	無声歯齒茎摩擦音
ʃ	無声歯茎硬口蓋摩擦音	ʂ	無声咽頭化歯齒茎摩擦音
ɗ	有声咽頭化歯齒茎閉鎖音	ɗ	無声咽頭化歯齒茎閉鎖音
ʒ	有声咽頭化歯摩擦音	ʒ	有声咽頭摩擦音
ɡ	有声軟口蓋摩擦音	f	無声唇齒摩擦音
q	無声口蓋垂閉鎖音	k	無声軟口蓋閉鎖音
l	有声歯齒茎側音	m	有声両唇鼻音

n 有声歯齒茎鼻音 h 無声声門摩擦音

母音

a	低非円唇短母音	ā	低非円唇長母音
i	高前舌非円唇短母音	ī	高前舌非円唇長母音
u	高後舌円唇短母音	ū	高後舌円唇長母音

グロス

1	一人称	2	二人称	3	三人称		
Nom	主格	Acc	対格	Gen	属格	Pron	代名詞
M	男性	F	女性	Sg	単数	Plu	複数
NP	名詞句	Pred	述語	def	限定辞	indef	非限定辞

註

* 本稿の執筆に当たっては、東洋大学の山中桂一教授より、貴重なご指導、ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

- 1) ゼロ繫辞文における二重主語構文の述語 (predicate) には、名詞句、形容詞句、前置詞句のつが可能である。本論では、以下「述語 (predicate)」と表記した場合、この3つを指す。
- 2) アラビア語には大別して標準アラビア語と、その変種である各地の方言のアラビア語の二つがある。本論では、標準アラビア語のみを対象とする。また、ここでいう「標準アラビア語」は、他に正則アラビア語、文語などとも呼ばれているものと同じである。
- 3) 義務的に限定されている名詞 (=主語) で始まり、繫辞を持たないアラビア語のゼロ繫辞文を扱う際、「主語」よりも「主題」を使用したほうがよいと思われるが、便宜上、「主語」を使用する。
- 4) 本論で「ゼロ繫辞文」と呼ぶ文は、通常、伝統文法では「名詞文」と呼ばれるものであるが、伝統文法では、名詞で始まる動詞文も「名詞文」と呼ばれるので、その名称の使用は適切ではない。それ故、ここでは動詞を含まない文を「ゼロ繫辞文」と呼ぶ。本論での「ゼロ繫辞文」は、以下のような名詞、形容詞、前置詞句の述部を持つ文に相当し、印欧諸語ではコピュラ構文で表現される文である。
 - a. He is a teacher.
 - b. He is the teacher.
 - c. This is a car
 - d. She is nice.
 - e. She is in the garden
- 5) アラビア語では、次の七つのものが限定の扱いをされる。(abbās Hasan 1979)
 1. 代名詞：分離代名詞の ana<私>、ʔanta<あなた.M.Sg>、huwa<彼>等と接尾代名詞が付加された名詞 kitābu-hu<彼の本>等。
 2. 固有名詞：Muhammad<ムハammad>、al-qāhira<カイロ>など。
 3. 指示詞：指示形容詞と指示代名詞は同形である。
hāḏā l-kitāb<この本> (指示形容詞)

五つの名詞 ?ab<父親> ?akh<兄弟> ham<父方と母方の親戚のだけか> fam<口> ðū<～持ち>	ū	ā	ī
二段変化名詞 外来語の固有名詞：Suqrāt<ソクラテス> 女性固有名詞：Makka<メッカ> ān で終わる固有名詞：Marawān 動詞の形態を持つ固有名詞：?ahmad 複合固有名詞：Būr saʿīd<ポート・サイド> > CuCaC の語形を持つ固有名詞：ʕumar CaCCaC の語形を持つ形容詞：?akhdar <緑色> 等。	u	a	a

⁸⁾ 標準アラビア語の人称代名詞は、以下の表のように、分離形と接尾形からなる。分離形は「主格」、接尾形は、「属格」と「対格」を表す。

代名詞		性	単数	双数	複数
分離形	一人称		?ana		naḥnu
	二人称	M[asculine]	?anta	?antumā	?antum
		F[eminine]	?anti		?antunna
	三人称	M	huwa	humā	hum
F		hiya	hunna		
接尾形	一人称		-ī		-nā
	二人称	M	-ka	-kumā	-kum
		F	-ki		-kunna
	三人称	M	-hu	-humā	-hum
		F	-hā		-hunna

⁹⁾ 対格-an は、広い領域を包括しており、あえて名前を与えるとすれば、「通格」(common case) という用語がそれにふさわしいであろう。アラビア語の格形-an には「対格」という通称からは予想も付かない数多くの用法がある。その一つが (13) の ?anf-an<鼻-Acc>である。この種の対格は、アラビア語伝統文法で tamīz<説明の対格>と呼ばれる。この「対格の場合、前の名詞を修飾し、「～において」という意味を表す。アラビア語の「対格」について、筆者は現在執筆中の論文において、アラビア語では、必須項以外の項は「対格」で標示されるという仮説を提案している。

参考文献

- 泉井久之助 (1967) 『言語の構造』 紀伊国屋書店 137-152.
 Hasan, ʕabbās. 1979. *ʔal-Nahw A-wāʕf*, Vol.1. Cairo: Dār ʔal-maʕārif., 206-440.
 Soliman, Alaaeldin. (2008) 「標準アラビア語における繫辞(コピュラ)の欠如について—分離人稱代名詞の機能—」 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻『言語情報科学』第 6 号 19-38.